



枕慈童(一名 菊慈童)

山より山の奥までも。道あるや時代なるらん。

是は魏の文帝に仕へ奉る臣下なり。さても我君の宣旨には、

まづ此あたりに徘徊し、事の子細をうかがはばやと存じ候。

それ邯鄲の枕の夢、樂しむ事百年、慈童が枕は古への、

頼めにし、かひこそなけれ獨寐の、枕言葉を恨みなる、

不思議やな 此山中ハ、虎狼野干のすみかなるに、

是なる菴の内よりも、顯はれ出づる姿を見れば、

是は不思議の言事かな。誠しからず周の代は、既に數代の

そのかみにて、王位も其數移り來ぬ。

不思議や我は其のまゝにて、昨日や今日と思ひしに、次第に變は

いかさま化生の者やらんと、身の怪しめぞ為しにける。

いや猶も其方をこそ化生の者とは申すべけれ。

忝なくも帝の御枕に、二句の偈を書き添え賜はりたり。

是は不思議の事なりと、各立ち寄り讀みて見れば、

枕の妙文 疑ひなく、

此妙文を菊の葉に、置く滴りや露の身の、不老不死の薬と

おもしろの遊舞やな(樂)

すなはち此文菊の葉に、悉く顯はるさればにや。幸も

山のだらり菊水の流れ。泉はもとより酒なれば、酌みては勤め

も酔ひひに、引かれてよろ〜と。たゞよひ寄りて、枕

を取り上げ戴き奉り、實にも有難き君の聖徳と、岩根の菊を、

もとより藥の酒なれば、

菊かき分けて山路の仙家に、そのまゝ、慈童は入りにけり。

頼めにし

移王の慈童に、行末までも寵愛せんなど約し給ひしを云う。

獨寐の 獨り捨てられて山中に寐るを云ふ。

枕言葉 常に口くせに言う言語。移王の日夜慈童に頼めたる約束の言葉

野千 狐の異名

非想非々想 非想天および非々想天として佛法に説く天上界の種類。

其身も酔ひに

「宵」と「ゑひ」と近き音を重ねて用ふ。

岩根の菊を 聖徳と「言ふ」を「いは」根に言い掛く。

「袖」にも「枕」にもかゝる枕詞。花を手折り伏せて「數く」と

花を筵に 菊の花を數物にして其上に臥すと、慈童が身に得たる七百歳

の壽命を、帝に譲り奉るとなり。

出典 謡曲評釈 五輯 大和田建樹 著

東京 博文館蔵版 明治四十一年二月十日發行

右、出典より本題部を抜粋して書写

今和四年十月三日 大中臣正比呂

拾遺集 秋の部に、清原元輔、「我宿の菊の白露 今日毎に幾世

頼めにし

移王の慈童に、行末までも寵愛せんなど約し給ひしを云う。

獨寐の 獨り捨てられて山中に寐るを云ふ。

枕言葉 常に口くせに言う言語。移王の日夜慈童に頼めたる約束の言葉

野千 狐の異名

非想非々想 非想天および非々想天として佛法に説く天上界の種類。

出典 謡曲評釈 五輯 大和田建樹 著

東京 博文館蔵版 明治四十一年二月十日發行

右、出典より本題部を抜粋して書写

今和四年十月三日 大中臣正比呂

拾遺集 秋の部に、清原元輔、「我宿の菊の白露 今日毎に幾世

